



# 紙の力

## 逢坂剛

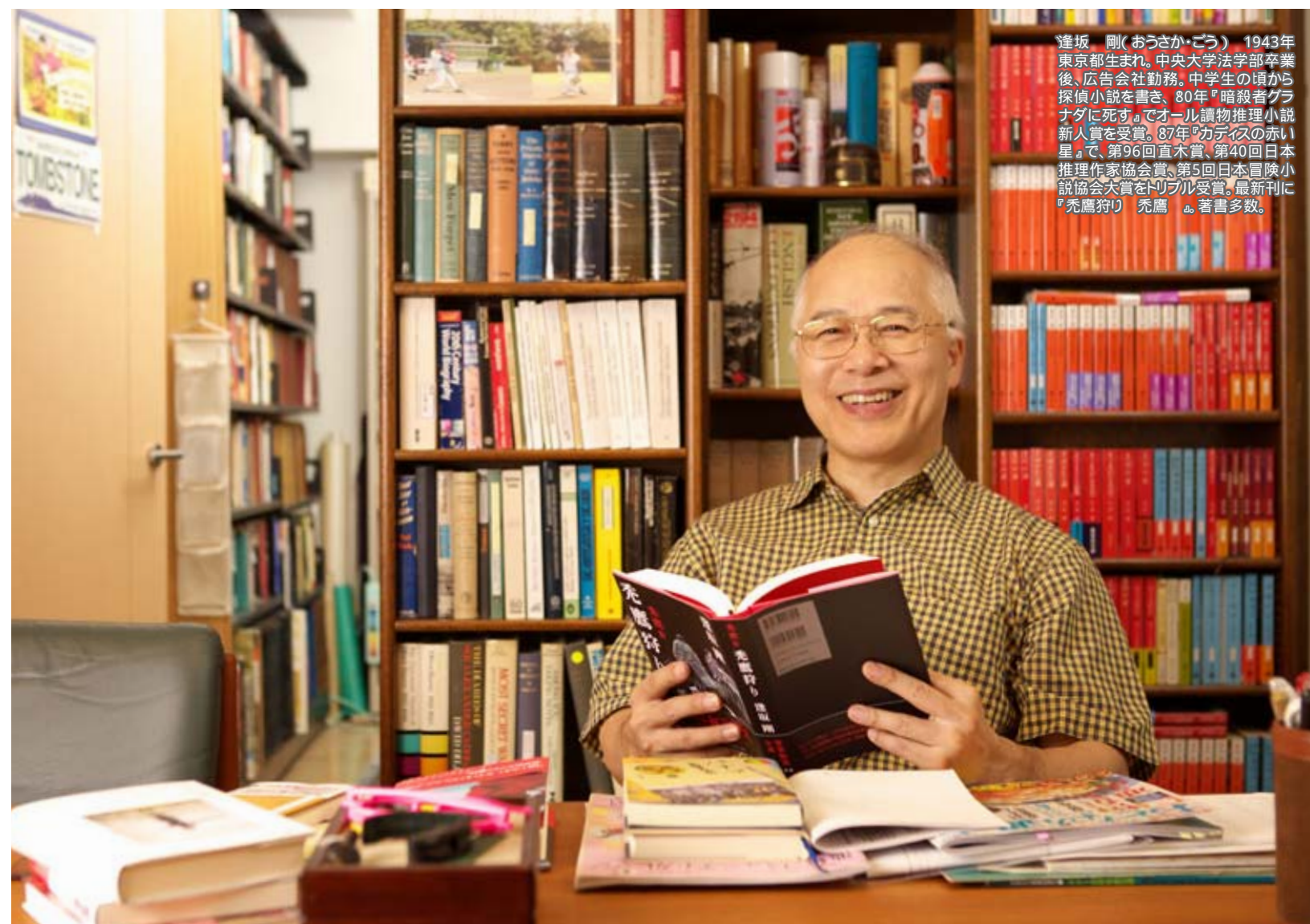
紙と聞いて、いつも真っ先に思い出すのは、孤高のキリシタン学者故松田毅一氏が残した、「エピソード」である。

松田氏は昭和三十年代から、ヨーロッパに残るキリシタン関連の古文書を求め、イタリアやスペイン、ポルトガルなど各地の文書館を歴訪し、採録する作業を続けた。本来は国家が行なうべき、ため息の出るような遠大なプロジェクトを、ほとんど独力で遂行した功績は、いくら高く評価されてもさげすむということはない。その報告の中に、ポルトガルの古都エヴォラの文書館で、ぼろぼろになった日本の屏風の下から、貴重なキリシタン関係の古文書を、発見した話がある。

問題の屏風文書は、数十年前の先賢たちの報告によって、存在が確認されている。ただし、時の経過とともに失われてしまったというのが、それまでの認識だった。ところが、松田氏は一九六〇年三月にその文書館を訪れ、問題の古文書の束が倉庫の奥に現存しているのを、確認した。それらは、屏風の下張りとして使われたために、糊でしっかりとくっついていた。しかし、目に触れる部分を見ただけでも、貴重な古文書であることは確かだった。松田氏は、文書を水につけて一枚ずつがす作業をしたい、と館員に許可を求めた。館員は難色を示したが、松田氏はそれらがいかに貴重な文書かを説明し、また和紙に墨で書かれた文字が、水につけても消えないことを請け合った。辛抱強い説得が功を奏して、館員はようやく許可を出した。

松田氏は、それらの文書を慎重にはがし、一枚ずつ写真で複写を取った。その中には、日本通として知られるルイス・フロイスの、自筆の文書も含まれていた。この発見の過程と、文書の内容の分析はそれからほとんどなく、『屏風文書の研究』（一九六三年・ナツメ社刊）として、刊行された。この本は、今でもときどき古書店で見かけるが、さほど高い価格ではない。とはいえ、中身の価値はそれをはるかに超える、貴重なものである。歴史

逢坂 剛(おうさか・ごう) 1943年東京都生まれ。中央大学法学部卒業後、広告会社勤務。中学生の頃から探偵小説を書き、80年『暗殺者グラナダに死す』でオール讀物推理小説新人賞を受賞。87年『カデイスの赤い星』で、第96回直木賞、第40回日本推理作家協会賞、第5回日本冒険小説協会大賞をトリプル受賞。最新刊に『禿鷹狩り 禿鷹』。著書多数。



的な重要情報が、紙という一見脆弱なメディアに記録され、何百年ものちの研究者に伝えられる、その事実を考えるだけで厳肅な気持ちになるのは、わたし一人ではあるまい。

火の発見、文字の発明など、歴史上の画期的な発見発明は、数多くある。その中で、わたしは紙の発明ほど人類に貢献したのではない、と思っている。一時期文書を作成したり保存したりする、便利な電子機器がこぞって開発されたとき、やがてペーパーレスの時代が来る、などといわれたことがあった。そうならなかったことは、だれもが知るところである。活字離れが叫ばれる昨今もまた、電子ブックなどの台頭で本がなくなる、としたり顔で言う者がいるが、「冗談ではない」。

紙と紙に印刷された文字が、未来永劫なくなることはないことは、わたしがここで保証するまでもあるまい。

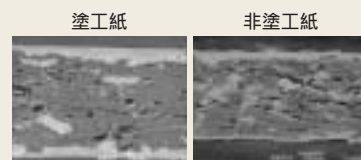
### PAPER Q & A vol.5

Q. 最近、カラー印刷のチラシが増えたように思うのですが...?

A. 『微塗工紙』という薄化粧美人が、紙の世界でも人気です。

紙は平らに見えますが、じつは繊維と繊維が重なっていて、凸凹しています。印刷は網点(小さな点)によって色と濃度を紙の上に再現するため、紙に対して高い再現性が求められます。こうしたニーズに応じて塗料で平滑にお化粧をし、インキのノリを改善したのが『塗工紙』です。みなさんが今読んでいる「週刊文春」のこのページも塗工紙のひとつ。高級美術書などは両面で40g/m<sup>2</sup>、ポスターやカレンダーなどは20g/m<sup>2</sup>、新聞のチラシや写真週刊誌

は15g/m<sup>2</sup>の塗料が塗られています。また、最近よく見かけるカラーチラシは『微塗工紙』と呼ばれますが、こちらは両面で12g/m<sup>2</sup>以下という薄さ! 紙質をカバーした上、1ランク上の品質を手に入れることができる“薄化粧”は紙の世界でも人気です。



次回は10月5日号、いしかわじゅんさんです。